

野菜が原因と考えられた腸管出血性大腸菌 0157 広域集団食中毒疑い事例について

土井りえ 本多麻夫

埼玉県において 2018 年に発生したサンチュを原因とする腸管出血性大腸菌 (EHEC) 食中毒事件について、埼玉県内で発生した各事例の概要と調査の経緯を報告した。

発端となった食中毒事例では検食が保管されており、発症者と同一遺伝子型の EHEC 0157 が検食から検出できたことから原因食品が速やかに判明した。また、埼玉県では EHEC 感染症・食中毒の原因究明事業として、患者の具体的な喫食情報を収集し、EHEC 分離株の遺伝子型を確定した上で、専用データベースへ入力して解析を行っている。本事例では、これらの情報が広域集団食中毒疑い事例の把握及び対策に非常に有効に活用された。

保育園や高齢者施設の給食は、国が定める大量調理施設衛生管理マニュアルにより調理するよう衛生指導が行われており、野菜や果物を加熱せずに供する場合には殺菌を行うこと、殺菌については規定濃度の次亜塩素酸ナトリウムを使用することが定められている。しかし実際には、発端となった食中毒事例の施設 A のように、情報や人員が十分に行き渡らず衛生管理を適切に行えていない状況が散見される。乳幼児や高齢者は発症すると重症化する可能性が高いことから、特に保育園や高齢者福祉施設などの給食施設には、マニュアルに沿った適切な衛生管理の徹底を粘り強く指導していくことが必要と考えられた。

公衆衛生情報 : vol. 51(4), 17-19 (2021)

An outbreak of food poisoning due to *Escherichia coli* serotype 07:H4 carrying *astA* for enteroaggregative *E. coli* heat-stable enterotoxin1 (EAST1)

K. Kashima, M. Sato, Y. Osaka, N. Sakakida, S. Kando, K. Ohtsuka, R. Doi, Y. Chiba, S. Takase, A. Fujiwara, S. Shimada, R. Ishii, A. Mizokoshi^{*1}, M. Takano^{*1}, K. Lee^{*2}, S. Iyoda^{*2} and A. Honda

In June 2020, a large-scale food poisoning outbreak involving about 3000 elementary and junior high school students occurred in Yashio, Saitama, Japan. A school lunch was the only food stuff ingested by all of the patients. *Escherichia coli* serotype 07:H4 carrying the *astA* gene for enteroaggregative *E. coli* (EAggEC) heat-stable enterotoxin 1 (EAST1) was detected in faecal specimens from the patients, and sample inspection revealed its presence in a seaweed salad

and red seaweed (*Gigartina tenella*) as one of the raw materials. Analysis of the antibiotic sensitivity of the isolates revealed resistance to ampicillin and cefotaxime. All isolates were confirmed to be of the same origin by pulsed-field gel electrophoresis after digestion with the restriction enzyme *Xba*I, and single nucleotide polymorphism analysis using whole genome sequencing. To our knowledge, this is the first report of a large-scale food poisoning caused by *E. coli* 07:H4, which lacks well-characterized virulence genes other than *astA*.

Epidemiology and Infection:149, e244(2021)

^{*1} Oita Prefectural Institute of Health and Environment

^{*2} National Institute of Infectious Diseases

埼玉県の自然観察公園における蚊の生息調査 (2014年~2019年)

佐藤秀美 三宅定明

2014年から2019年にかけて埼玉県内の公園における蚊相把握を目的に、埼玉県自然観察公園を対象地として、CDCトラップを用いた蚊の生息調査を実施した。また、ヒトスジシマカについてはデング熱等の重要な媒介蚊であるため発生源調査も実施した。

本研究では8属15種に属する5,059匹の成虫を採集した。これらの15種は、公園の現在の蚊相と考えられる。

2018年に収集された蚊の数は、最も少なかった。これは、この年の5月から8月までの平均気温が例年よりも高かったためであると推定された。

また、2016年にはオオクロヤブカやコガタキンイロヤブカの数が増加したが、その原因の1つは夏の一時的な大雨であると推定された。

6年間の調査では、ヒトスジシマカが蚊の全種の28.2%と最も高い割合を占めていた。公園内でヒトスジシマカの発生源を調査したが、確認はできなかった。なお、森内の調査は立ち入り禁止のため実施できなかったが、隣接での人囀調査やオビトラップの結果から、森の東側にある樹洞等で発生していると推定された。

また、公園内の小水路および堰でアカイエカ群の幼虫を採取したが、それ以外の蚊幼虫は確認できなかった。

ペストロジー : 37(1), 1-7 (2002)

